

岩佐大兄に捧ぐ‘ 思いで話 ’

小笠原 亮

はじめに

私は岩佐さんより2年あとの生まれ。高校を卒業して、地元の愛知県立清州園芸試験場で、清水基夫、石黒嘉門両先生から園芸の手解きを受け、その後京都大学農学部付属園芸場で、瀬川弥太郎先生に教えを受けた。その後、……。

昭和32年春、名古屋の街角で、間口3間、奥行2間の小さな売り場の「名古屋園芸」を創業した。この頃漸く観葉植物が一般化しようとした時期で、細々ながら商いを続け、従業員も一人二人と少しずつ増えていった。

しかし次に来るのは‘洋蘭の時代’の気配を感じとり、「日本洋蘭農業協同組合」に入組し、取り扱い品目の一つの柱とした。しかし洋蘭の仕入れは生産者を廻り相対仕入れで、公開取引市場の必要性を感じた。そこで自宅の敷地の一部を利用して、日本初の洋蘭専門取引市場「日本洋蘭株式会社」を、昭和37年、中部地方の洋蘭生産者の若手同志と共に立ち上げた。

幸か不幸かこの業務は時流にも乗り、取り扱い量、額ともに大きくなり、社屋が手狭となって移転した。そこで困ったのは自分で建てた市場建物が抜け空となって残った。

そこで軌道に乗った日本洋蘭の初代専務を辞して、再度園芸小売店を規模拡大して、街中の園芸店の‘有様’を追求することとした。

岩佐さんとの出会い

名古屋の中心部に敷地面積150坪の園芸専門店を開設するに当たり、誰か指導的役割をしていただける方とは悩んでいたところ、同じ日本洋蘭の役員仲間であった浜松植木の外山章太郎氏より、岩佐吉純さんと云う方がおられる、ご紹介しようとしてくださり、二人で横浜の当時反町の坂田種苗本社、園芸部を訪問、初めて岩佐さんにお目にかかった。

私も清水基夫先生の弟子の端くれ、草花や球根植物に

ついては少しは識っているつもりが、岩佐さんの豊富な知識には比べもできず。また営業についても全国の種苗、園芸店を実際目で歩き、主人と膝を交えての営業をなさっておられ、正に園芸商を熟知なさっておられる方と思い、以降店舗設計者、建築業者等を伴い横浜詣でを致したが、その都度いやな顔を一つも見せず、丁寧に私達の質問に答えていただき、又自分達の気付かぬ事なども、「こうしたことは園芸店の基本、そうしたことはまずいよ」など、御教示下さった。お陰で昭和41年8月の末には、当時としては新しい感覚の(自分はそう思っている)店ができた。

開店前日は、商品と共に岩佐さん自ら来店され、値札付、商品配置等、従業員と一処になって汗まみれでお手伝い下さった。漸く一段落を見た時、すでに夜半となっていた為、別棟でお寝み願ひ、明朝その部屋へ参りますと、きちんと夜具が畳んであり、「ご盛況を祈ります」のメモ。開店の朝、朝食などの迷惑を掛けまいとのお心遣いか。寝具に手を合わせて岩佐さんのお心遣いに礼を云ったのを昨日のこのように思い出されます。

割烹「勝美」の酒

開店以後、ことあるごとに前記外山氏と横浜へ出向き、商品の仕入れもそこそこに、話が済むと「一寸食事に」とお誘いいただき、横浜の中心部の「勝美」という店へ連れられてご一所した。

此の店は、カウンターの店であったが、正面に灘の生一本「剣菱」の四斗樽の薦被りがデーんと控え、注文を受けると、樽の下部に取り付けてある‘飲口’の木栓をキュッキューと云う音を響かせ、‘片口’に酒を受け、‘爛’なり‘冷’の好みに応じて出してくれた。こうした店であるから出る‘肴’も悪からうはずがなく、つい酒を過ぎすのが常であった。もう一つこの店は、「もうこれで上がりにするよ」と申し出ると、シジミの味噌汁を一椀出してくれた。‘悪酔い予防’として召し上がってくださいとの主旨。

年に数回は勝美でご馳走になり、肴のよし悪し、酒の味に至るまで常に岩佐さんがお師匠様であった。

園芸古書、資料集め

美味しい酒の性ではなく、元々の持病が悪化し、昭和49年春、胃穿孔により胃袋を殆んど摘出。幸いにも回復したのを期に、お小遣いの行き先を飲み屋から古本屋へ変更した。元々この方も学生の頃より嫌いでなく、本郷の井上書店や木内書店から送られてくる‘古書目録’で洋装本は時々求めていたが、‘古典籍目録’は、時代劇に出てくるような‘本’や‘掛軸’、‘刷もの’などで自分にとって目新しく、少しサクラのことで行詰っていたことも手伝い、サクラの資料からこの道へ足を踏み入れて仕舞った。

岩佐さんとの会話にもこうしたことは入り込んで、昭和も終りの頃ともなると、岩佐さんは「ロンドンから『』の初版を送ってきた」、「京都でこんな本草の本見つけました」等、電話や手紙の上でのやりとりが多くなり、そのことが少しずつ世間様の知るところとなり、「洋書の岩佐、和本の小笠原」と人の噂になるようになり、良き相談相手であり、共に喜び、共にものを持つ苦しみを味わう結果となった。

二十世紀名花百撰見立競

平成12年20世紀が終るにあたり、日本の園芸はこの世紀にどんな花を咲かせたか、江戸時代の人々の花遊びに見習って、見出しのような‘花番附’を作って遊ぼうと、息子の誓と考へ、作り始めた。或る時、岩佐さんにその主旨を話し、「チューリップに‘カイザースクルーレ’を入れたいが」と申したら、即座に、「‘カイザー’は18世紀にできてよ」と返ってきた。やはり草花や球根は岩佐さんに、切花生産などは米村浩次氏に一枚加わってもらわないと、後世の人に笑われると思い、「差添」(今風にはアドバイザー)として名を連ねていただき、ご教示を戴いた末に(次頁)のような番附ができあがった。

東西の筆頭に、バラ‘ピース’、ユリ‘カサブランカ’を置いた。この制作過程は実に楽しく遊ばせてもらった。

しばしの別れ

3年前前岩佐さんから、奥様とお二人で南アフリカをご旅行なさったお話を承ったことがある。ヨハネスバークからケープタウンまで、1車輛3組のみ乗車できる特別車で、夕食時にはお召しものを着替えて席に着き、ヨ

ーロッパ並みのワインを召し上がったなど、など。

それに比べるべくもないが、小生も今年5月中下旬、中国広東省、雲南省を家内と旅行して帰国2日目の、5月28日に岩佐さんの奥様よりお電話が入り、「再入院され、そして私に会いたい由」。お電話の趣き、ご容体唯ならぬことを察し、私を最初に岩佐さんに紹介して下さった外山章太郎氏に連絡、明るる29日、共に横浜の病院へお見舞に参上した。

その時岩佐さんは、相当ご病状が進み、少しの会話もお苦しそうで、休みやすみお話をさせていただいた。内容は、予ねて原稿を書き進めておられた、ご自分のコレクションの一部である「園芸カタログ」の解題本『カタログ・オブ・カタログス』の編集、刊行の取りまとめをしてほしい、とのこと。その間別席で待っていてくれた外山氏のことを、いつまでも待たしては申し訳ないと病を押して尚、人を気遣う思いやりに尊敬の念を一層深めながら、「その事は承知した、及ばずながら」と申し上げ、長居はお体に障ると存じお別れの言葉を申し上げそっと手を握らせてもらった時の、力なく又小さく感じられたこと。廊下に出て奥様は、「長くて3月、早ければ1月」と、医師の言葉を伝えて下さった。しかしご病状はその夜から更に悪化し、このお見舞が今生のお別れとなってしまった。

『カタログ・オブ・カタログス』について

ご生前この件につき、岩佐さんが書かれたり、写真撮影をされたものの整理をお手伝いしていた方、その他断片的に依頼されていた方々に僭越ながらお集まりいただき、時には奥様にもご出席いただいて、岩佐さんのご意志にできるだけ添うような編集になればと関係者で鋭意進めさせていただいている。何んとか一日も早く、ご仏前に刊本お供えし、ご報告したいものと願っている。

幕末維新の志士の句に

「散る桜 残る桜も 散る桜」がある。

私は少し遅れて参りますが、岩佐大兄と再びお浄土でお目にかかり、ゆっくり園芸の四方山話をしたいものと念じている。

合 掌

平成18年8月31日

追伸 18年10月3日現在、「カタログ・オブ・カタログス」の編集作業は原稿、写真共におおむね整理がつき、各頁の割付作業を進めています。A4版300頁くらいの本となりそうです。

